





# 近況報告

## それから



京都大学名誉教授

下谷 政弘  
(平成二十退職)

これまでいくつかの大学の経済学部で教えたことがある。しかしここだけは何かが違う。雰囲気やわらかいように感じる。普通、経済学部の学生の男女比とは、京大もそうであったように五対一ぐらいが相場だろうか。しかし、私が昨年赴任した福井県立大学の経済学部(定員二〇〇)では、なんと一対一。実際に授業に出席している学生数でみれば三分の二以上が女子学生。これには、福井県では他の大学に社会科学系の学部のないことが理由とされている。国立の福井大学には文科系の学部としては教育地域科学部だけ。いくつかの私立大学も含めて福井県の大学には経済学部も法学部もない。また文学部もない。優秀な福井の女子たちが福井県立大学の経済学部を集まってきている。しかも、九頭竜川沿いに立地するキャンパス(永平寺町)に学部は三つだけ、そのうちのひとつが看護福祉学部であることもあって、広大かつ静謐なるキャンパスには女子学生ばかりが目立つ。雰囲気やわらかいはずである。

から週末にかけては関西で雑用あれこれ、というのが生活パターンとなった。愉しみは京大文学部のクラスに毎週顔を出して平安朝から院政期にかけての日本語を勉強すること。はるか昔に生じた漢字漢文と日本語(ヤマト言葉)の出会い頭の衝突。そこに生まれ落ちたのがいわゆる「訓点語」だが、これが面白い。これを勉強するのが私の若い頃からの夢だった。訓点語学会にも加入した。こうして、週一、二日でもdismal science(経済学)の世界から離れて、のんびりと毎日を過ごしはじめた。庭にバラ園を作った。キッチン・ガーデンで野菜作りもはじめようとしていた。

しかし、昨年からの世界恐慌には面喰った。日本経済もまた大混乱に陥っていく様子を見て、やにわに「夢うつつ」の状態から醒めて経済学に舞い戻らざるをえなかった。世界恐慌のなかで日本経済が急速に変質し、持株会社を用いた大企業の経営統合が相次いだのである。市場からゲームのプレイヤーがつきつきと消えはじめたのである。市場原理主義の風潮が強まるなかで、持株会社は業界再編の道具として重宝され、その結果として市場は急速に寡占化の方向へ向かっていった。そこである日、

緊蹙一番、あらためて「持株会社原論」を書かねばと思いつたのであり、この六月に上梓できたのが『持株会社と日本経済』(岩波書店)であった。持株会社についての書物はこれまでも二、三のものを刊行してきたが、今回のそれは以前にも増して辛口のものとなった。眼前の日本経済の行く末を真剣に考えれば、あとになって「懺悔」や「転向」などしたくないと思っただけである。

京大経済学部を離れて、あらためて自分が勉強してきた経済学とはいったい何だったのだろうかかと考えることがある。かつてとは異なつて、今日の経済学はなんと味気なく、あさましいものになり果てたことかと嘆くことがある。日本の社会や経済が、いつの間にか何だか不気味なものに変質してきたことに怖れおののくことがある。そんななかで、定年退職後の私のささやかな夢は、ただ訓点語に関する作品を何か書ければ、ということである。あるいは、どこか福井の大学にせめて文学部でも作れないものか、という次元のことである。とは言いながらも、世界経済や日本経済がさらに大変化でもするようならば、再度おっとり刀で駆けつけることになるのかも知れない。

以上が、私の「それから」である。

## 悠々自適?

京都大学名誉教授

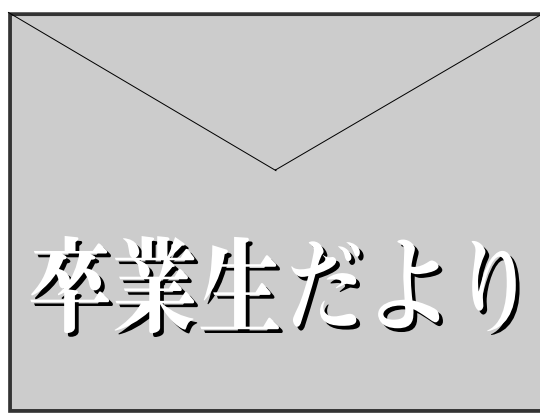
田尾 雅夫  
(平成二十退職)

昨年来、会う人ごとに言われる。「悠々自適でけっこうですなあ、羨ましい」。言われるほどではないが、桜の花びらが散るその下のベンチでうたた寝したり、芝生に寝転んで上を見れば、青い空しかないというのは、何ものにも変えがたい快の経験ではあることは疑いない。冬のある日、北東の手前にある山のはるか向こうに、白い大きな山が見えたので、もしやと思つて地図とコンパスで調べてみたら木曾の御岳だった。そのときは、とくに理由はないのだが感動しました。大学の西門までは宅地が迫っているが、東門を出ればもう山野である(山を一つ越えれば万博会場)。その間に開けた

大きなキャンパスにいたのであるから「帰りなん、いざ田園ですわ」という返事も、それほど奇を衒つてのことではない。とはいいながら、まだ枯れているわけではない。枯淡の境地とはまだはるかに隔たっている。京都にいたとき以上に俗物になりそう。しかも、これからしたいことは山のようにある。これまでに蓄えた情報は少なくはないと思うし、量だけでいえば人後に落ちないであろうという自信もある。これを何とか処分しないことには、この世から出て行けないような気分である。新しい娯楽の生活がまたはじまつたような気分でもある。少なくともそのような気分には追いやる

ことから、残された人生がはじまる。であるから、断じて悠々自適ではない。

西田幾多郎も田辺元も、その代表的な作品を続々と世に問うたのは退職してから以後のことである。西田は鎌倉に、田辺は軽井沢に蟄居してからのことである。私もと考える。大先達の擧に倣うとは厚かましいと嘯われそうであるが、本人はいたって真剣である。彼らは早く辞めたではないかという反論(あのころの定年は早かった)もあるが、私たちの場合、超高齢社会では彼ら以上に長生きを強いられるかもしれない。ならば、彼らを越える仕事は出来ないものか。多少滑稽であるが、そういう気分になつている。そういう気分になれることは喜んでよいことである(と、勝手に、私は思い込んでいます)。勝手だろうとは思いますが、身近の人たちには重職に就けてくださるな、それ以外のことは何でもするからとお願いをして回っている。残された時間はそれほど多くない。せいぜい十年、長ければ十五年から二十年くらいか。



## 卒業生だより

### 経済学との出会いと感謝



細野 薫  
(昭五十九卒)

八四年に京都大学経済学部を卒業してから、早や二十五年が経ちました。今振り返ると、大學生生活の四年間は、就職してからの二十五年間よりも、長かつたようにさえ思います。何か社会の役に立つことができなかつたかと思ひ、経済学を志したのが、高校三年生のときでした。しか

し、入学後は受験勉強の反動なのか、全く勉強せず。大学には行くものの、生協や喫茶店で友達とダラダラして過ごす日々が続きました。そうした生活の転機となったのが、三年生から始まった本山美彦先生のゼミでした。ゼミでは、ケインズの「貨幣論」や「一般理論」を輪読しましたが、一文一文、とても丁寧に読み進めます。先生が考え込まれて、一時間や二時間沈黙が続くこともざらでした。内容はほとんど理解できなかったのですが、学問の深みを垣間見たような感慨があったのを覚えています。経済学を多少まじめに勉強し始めたのも、このころからです。そのきっかけとなったのは、本山ゼミへの加入と、現在京都大学経済学部で教鞭をとられている江上雅彦君との出会いがありました。江上君と共に、「ミクロ経済学」の教科書と格闘した楽しい思い出があります。

卒業後は、経済企画庁（現内閣府）に入庁し、行政、統計の作成、経済政策の立案等の仕事に携わりました。入庁五年目には、アメリカに留学し、あらためて経済学の基礎から学び直す機会を得ることができました。学部の頃には漠然と「経済学を活かした仕事ができれば」と思っていたのですが、帰国後間もなく、大学で教える機会も与えられ、経済学の教育と研究を本格的に志すようになりました。

九九年には、経済企画庁を退職し、名古屋市立大学の教員として四年間勤務した後、〇三年から現在の学習院大学に勤務し、主に金融論、マクロ経済学という分野を研究しています。

研究対象には事欠きません。それでも、目の前の現象に振り回されることなく、困難でもできるだけ本質を見極めるよう、じっくりと考えることが大事だという姿勢は、本山先生から教えていただいたものであり、その後の私の研究生活に大いに役立っています。この場を借りて、厚く御礼申し上げますとともに、今後ともそうした姿勢を貫いていきたいと、決意を新たにしています。

## 卒業して二十周年を振り返って

辻 篤  
(昭六十二卒)



私は昭和五十八年（一九八三年）に経済学部に入學しました。マルクス没後百年、ケインズとシュンペーターの生誕百年にあたるこの年、『経済セミナー』や『経済評論』等の雑誌がいくつもの特集を組んでいた事をよく覚えていています。また「ポストモダン」「現代思想」が流行し、ご多分に漏れず私も、浅田彰氏の『構造と力』を小脇に抱えた口です。吉田寮の在寮期限問題で学内が揺れていました。

学部に進み、経済原論の八木先生のゼミに入りました。一期生だったと思いますが、ゼミ生は最初二名からスタートしました。先生から何を勉強したいかと尋ねられ、何と返答したか定かに覚えていませんが、十八世紀の科学思想から始まり、資本論、BS/PL分析、経済白書の輪読まで、かなり幅広く自由に勉強させて頂きました。兵庫県三田市のセミナーハウスにゼミ

ミ合宿に行ったことも良い思い出です。ただし、音楽研究会なるサークルの活動とアルバイトに明け暮れていた私は、真面目な学生ではありませんでした。八木先生には今でも、申し訳ない気持ちと感謝の気持ちを抱えています。

卒業後、関東のAV機器メーカーに就職し、何がどう間違っていたのか、人事部に配属されました。この間二十二年、工場、海外、本社など勤務場所は変わっても、一貫して人事勤務畑を歩んできました。人事領域も、時代によって流行とすたりがあり、成果主義、ストックオプション、カフェテリアプラン、メンタルヘルス、雇用の多様化、裁量労働制など、キーワードには事欠きません。

最近の話題として、非正規雇用の問題があります。昔は有期社員の雇止めや、同一労働同一賃金の原則が主たる論点だったこの領域ですが、現在は「派遣切り」「派遣契約の終了」が社会的関心事となつています。余程のことがなければ解雇されない正規社員と違い、派遣社員の身分保障は決して厚くありません。実際、優秀な派遣社員（正規よりも優秀な方も大勢います）の契約が終了していくのを見るにつけ、何とか救う手立てはないものかと思えます。一刻も早い労働行政による救済が望まれます。その際のポイントは「企業活動は、雇用調整を伴わざるを得ない」という点です。景気循環がある以上、Redundancyは避けられません。正規社員の雇用調整という観点で、事実上抜けている今の労働行政は、見直す必要があると思えます。

## 老大学院生体験記

中野嘉彦  
(平十四修士修了)



わたしが大学院に入學したのは、四十年に亘る企業でのサラリーマン生活を終了して、かつて大学時代にわくわくして、目の前の鱗が取れたような思いをしたマルクスの思想をもう一度検証してみたい、思想的バックボーンにしていたマルクスが哀れにも地に落ちていくことへの検証を試みたい、とふと思立ち、若い諸君に混じって院試に挑戦して合格の僥倖を得たのである。時に六十三歳の年齢であった。入学式では「ご父兄様は二階です」と案内されるし、生協カートの申し込みでは「お子様ご本人が署名してください」といわれるし、図書館では「先生」と呼ばれるし苦笑の連続だった。困ったのは英語のテキストを使用するゼミで若い学生や留学生の読解スピードについていくことだった。それでも老学生に対しては親切で素晴らしい先生方に恵まれて研究に夢中になった。研究のテーマは、マルクスが『資本論』で語った「株式会社」が未来社会への通過点となること。しかし株式会社は、詐欺師と預言者の顔を持つ」という謎のような予言である。『資本論』でもその他のマルクスの文献でも、商品、貨幣、資本、市場の廃絶を説くマルクスがこれら全てを必要とする株式会社を何故「未来社会への通過点」と述べるのか。マルクスの研究を初期の時代から順をおって研究していくと、革命家マルクスと

は異なる、冷徹な科学者マルクスの新しい像が見え出してきた。マルクス自身が資本主義そのものの中に未来社会を意図せず形成していく重大な要素があると感じ、その核は株式会社のなかにある、労働者が自ら意欲的にインノベーション、改良改善をしていく可能性、しかも労働者と企業家とが協力して、アソシエーションが形成されていることである。しかも株式会社制度そのものには、剰余価値までも社会化する民主主義が込められている。ここに未来社会への通過点となる「預言者」の顔を感じ取った。これは株式会社生活四十年の私の経験から充分理解できる。しかし昨今のサブプライム恐慌は、株の空売り、株格付け会社による詐欺的信用偽装要するに株式会社制度の「詐欺師」の顔である。この謎解きを、修士課程を終えた後も在籍させていただいてはほぼ十年間続けた。今回これらの研究成果を世に問う決心をして上梓したのが『マルクスの株式会社論と未来社会』（ナカニシヤ出版 二〇〇九年五月刊 三百二十八頁）である。興味のある同窓生の皆様には是非お読みいただきたいと思えます。

## 贅沢な

### 博士課程の生活

安起正  
(平十七修士修了)



私が文部科学省の研究奨励学生試験に合格し、京都大学大学院経済学研究科に入ったのは二〇〇二年四月の事でした。博士と言うタイトルがなければ研究者として自分の声すら出せない韓

国の社会の雰囲気の中で、留学と言うのはある意味では、当時研究者としての生活を目指していた私として仕方がない選択肢であったかも知れません。しかし、三十三才という少くない歳であった私は、将来の進路に對する不安を抱えていました。いくら短い期間に博士学位を取っても三十九才で、そのようないい歳をして韓国に帰ってもいいのかなと言う悩みもありました。しかし、私が選択した以上これしかないだろうと考えて研究の日々を過ごした六年余りの日本での留学生活でした。とにかく研究と業績、未来の就職への不安を隠しながらの京都大学での生活でした。

京都大学経済学研究科の文世一教授のゼミで都市、交通経済学の勉強をはじめからやり直した私は大学院に入ってから二年で修士学位を取り、その三年後の二〇〇八年に経済学博士学位を取る事が出来ました。今振り返って見ると短い期間に学位を取る事が出来たのは、指導教官の厳しくてもいいいな指導と未来と就職への不安を考えずに研究だけに集中して心のゆとりを取り戻そうと努力した結果であると思えます。

博士学位をもらって、暗くて熾烈な就職活動の期間の後、韓国の新しい職場に来て一年近くになりました。私はソウル市政開発研究院と言う韓国の研究所で働いています。特にソウル市が抱えている交通混雑の緩和に對する政策開発や政策評価、この分野でよく言われている交通需要管理政策の研究が私の主な業務であります。博士課程では、研究した分野が交通経済と言う分野に限られておりましたが、いざ研究所と言う組織に入ってみると研究主題の次元の広さを身にしみて感



じる事になりました。博士課程ではもっぱら自分の関心分野だけを深く考え、集中的に研究する事になっていました。少なくとも一年に一つの論文を書かなければと言う負担はあったものの、今の研究のスタイルはまったく違う世界にいるような気がします。というのは、今は自分が関心がなかった分野にも研究の挑戦をしなければいけないからです。ちなみに、私の担当分野はただ交通政策だけではありません。都市産業分析、物流政策、観光政策等の研究も私の研究分野になっていきます。普通の研究は同時に三つ、四つが行わ

# 私の研究

京都大学大学院経済学研究科 教授

堀 和生



今回クライスラーとGMの相次いだ破綻は、米国製造業の衰退を象徴するものとして印象深い事件である。それと対比されるものは、日本や中国という東アジアが、世界工業の中心になっていくという認識であろう。この様な認識が広く一般化したのはそれほど古いことではない。私が学生であった一九七〇年代には、日本は後れた資本主義であると考えられていたし、日本を除くアジアにおいて経済発展があること自体が認められていなかった。経済史研究の分野においては、日本近代の後れや歪みを強調する講座派（戦前岩波書店の資本主義発達史講座に由来する学派）の影響力は強かったし、アジアに関しては何故にアジアは停滞したのかというアジア的生産様式という議論がまだ生きていた。私

の経済史の勉強は、これらの文献を読むなかで、日本を含めたアジアの後れた点を明らかにして、その発展の可能性を説明することが課題であるという雰囲気の中で始められた。アジア全般の経済発展はほとんど念頭になかった。このような経済史の研究状況を一変させたのは現実世界の変革そのものであった。一九七九年OECDレポートが「NICs（新興工業国群）の衝撃」と呼んだ韓国と台湾の工業国としての登場は、当時の私たちの歴史観を揺り動かすのに十分であった。日本によって植民地にされ、いまなお貧困な農業社会だと考えていた韓国と台湾が、突然に工業製品輸出国として現れ、両国からの輸入品は日本の衣料品や雑貨製品市場を席巻した。そして、この衝撃は、八〇年

代に東南アジア製品、九〇年代には中国製品によって繰り返される。また、八〇年には日本の鉄鋼生産高と自動車生産台数が米国のそれを凌駕した。E・ヴォーゲルが『ジャパン・アズ ナンバーワン』を発表したのもこの頃のことである。このように、日本が先進資本主義国になり東アジア諸国が資本主義的に発展している事態が否定しようもなくとなると、七〇年代までのような日本とアジアの後れと停滞性を強調していた学問潮流は急速に影響力を失っていった。このような現実の社会認識の激変は、大学院生として自分の研究課題や方法を模索していた私にとっても大きな衝撃を与えた。文学研究科で朝鮮近代史の研究をしていた私は、日本の植民地支配は後れて野蛮なもので、その経済力の弱さを軍事力でカバーしたのが日本の朝鮮統治の特徴だと言う通説的な理解を受け入れていた。しかし、二十世紀後半に東アジアにおいて資本主義化が急速に進行した事実を踏まえると、その資本主義発展の条件や起源を歴史的に探究することが課題となる。その様な発想で、朝鮮近代史を見直してみると、いままで見えなかったことを新たに発見でき、理解できなかつたことのつじつまが合ってくる。近代朝鮮社会の変化が激しいのは、従来は日本の支配が野蛮で過酷だからとされていたが、日本の植民地政策は極めて資本主義促進的な性格を持っており、また朝鮮社会も朝鮮の人々もそれに対応していることがわかってきた。植民地政策として近代的土地所有権が導入されており、それに誘導され日本から国家資本や民間資本が大量に投入されていた。鉄道や電力等のインフラが整備されており、工業が急速に発展していたが、朝鮮人経営の工場や会社も急速に増加した。多数の朝鮮人労働者が形成されていた。朝鮮は日本経済圏の中で重

要な工業地帯の一つになっていた。日本は植民地においても日本内地と同じような産業政策をおこなない。また朝鮮社会も日本社会と共通する要素を多く持っていたので、急速に資本主義が発展した。この様な認識に到達した時に、私の研究関心は大きく様変わりし、朝鮮経済史の様々な問題を新しい視点から解明できるようになった。その後、韓国の研究者との共同研究をおこない、また韓国ソウル大学への留学を経験したことによって、自分の研究に自信をもつことができた。それが『朝鮮工業化の史的分析』（有斐閣、一九九五年）である。研究者としてはずいぶん遅い著作刊行であったが、研究過程に大きなパラダイムの転換があったことと自分の能力を考えれば、これはやむを得ないことだと考えている。この著作によって、京都大学経済学部から博士学位をいただいた。

限りある研究者人生において、朝鮮経済史研究のみを続けることには魅力がなく、新しいテーマに挑戦してみたいと考えた。自分の従前の研究を相対化してより広い視点を得るために比較が有益だと考えて、日本のいま一つの重要な植民地であった台湾経済史の勉強を始めた。今回も幸運なことに中村哲先生と一緒に台湾研究者と共同研究に取り組む機会をくださった。また台湾の様々な先生との交流が生まれた。その延長上で、台湾の中央研究院に留学するチャンスも得ることができた。この台湾経験は、朝鮮経済史研究者であった自分の視野を大きく広げてくれた。さらに、中国語を勉強したおかげで、研究対象を台湾に限定する必要がなくなり、中国大陸の経済史全体にアクセスできるようになった。この様な条件が重なったことによって、私の研究テーマは、戦前戦後を通じて日本を含めた東ア

ジアの経済発展、資本主義発展というものに広がっていった。従来、東アジア各国の歴史は一国的に研究されてきたので、十九世紀末日本の産業革命と、日本統治期の朝鮮・台湾の経済変化と、一九七〇年以後の韓国・台湾のNICs的な経済発展は全く無関係なものとして理解されてきた。しかし、十九世紀英国からヨーロッパや北米に資本主義が広がっていった歴史的過程を踏まえるならば、東アジアにおけるこの百年間の変化は、日本から資本主義が波及拡大した過程と見ることが出来る。それがヨーロッパの場合は主権国家の主体的な対応であったものが、東アジアでは日本帝国による再編成という違いがあった。日本は朝鮮のみならず、台湾や満洲において積極的な資本主義導入政策をおこなない、いずれの植民地においても社会の資本主義化が急速に進行した。日本帝国全体が一つの資本主義として発展したのであり、これは世界に類例のない歴史過程である。一九三〇年代日本内地と植

民地との貿易規模は、英国のそれを上回り、日本は世界最大の植民帝国に変貌していた。このような東アジアにおける資本主義の展開によって、東アジア地域の社会は戦前戦後を通じて世界平均の倍近い速度で経済成長を上げていた。非欧米社会のなかで、東アジアがこのように急速に変化したのは、東アジアには非常に発達した農業社会が存在したからであり、それが各地域で資本主義が発達するのを根底から支えたのである。こうして成立した資本主義は、日本内の要因のみでなく、朝鮮・韓国や台湾の自然的社会的条件を組み込んで成立したものであり、東アジア資本主義と把握すべきである。私は経済史研究のあゆみのなかで、このような歴史認識に到達し、現在さらに戦前と戦後の連続と断絶の問題を素材に研究を進めている。このような問題に関心のある方は、私の最新著作『東アジア資本主義史論』ミネルヴァ書房、二〇〇九年八月刊）をご一読願いたい。

## 出版案内

### 『グローバル戦略の進化』

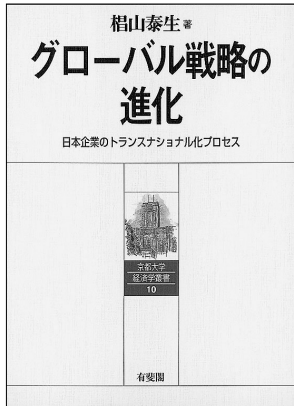
有斐閣 二〇〇九年



京都大学経営管理大学院 准教授  
梶山 泰生

一九八〇年代までの日本の製造企業は、その競争力によって、世界中の企業を目撃として位置づけられていた。これらの企業は、本社に多くの資源と権限を集中させることでグローバルに効率を追求することに優れているとされ、その戦略には、「グローバル戦略」というラベルが与えられていた。ところが、一九九〇年代以降に





に対応しながらグローバルな効率を実現するという難しい課題に直面せざるをえなくなってきた。かつて、「グローバル戦略」によって競争優位を実現した日本企業が、その後どのように経営資源の配置を国際的に分散させて「トランスナショナル」へと進化していったのか。そして、その配置の分散、あるいは国際化を説明する理論的枠組みは、既存理論のままではよいのか。これらの問題に、主として自動車産業の製品開発を対象として事例研究を実施して事例に密着した論理を構築することで、一応の答えを提示しようというのが、本書の目的である。

本書の事例研究からは様々な論理が構築されているが、特に強調したいのは以下の点である。第一に、製品開発の海外拠点で現地の知識を活用するためには、本国の能力を雛型とした組織パターンを移植することがむしろ重要になることを示した点である。既存研究で暗黙のうちに前提とされていたのは、現地に対する組織パターンの適応の重要性であった。これに対し、本書では、直観に反した論理を、事例から構築している。現地のやり方に合わせるのではなく、むしろ本国の組織パターンを世界中に複製していくことが、結果として新しい知識の開拓と活用につながる点である。

第二に、この製品開発の海外拠点の組織能力の構築は、現地適応の水準と、国際的な統合の水準との間で不均衡を解消するような形で進んでいくということである。

現地の知識が自社と切り離れた形で存在しているのではなく、国際的な統合のレベルを高めることで、現地で未活用になっていく知識が活用されるようになり、またその高い活用の水準に到達することによって、さらに現地で高度な知識が掘り起こされ、未活用状態になる。このようなプロセスを繰り返しながら、製品開発の海外拠点の組織能力の構築が進むのである。

第三に、このような現地での組織能力の構築が、現地環境や資源に対して逆に影響を与えることも示している。特に新興国に拠点を構築する際には、現地適応を高めることによって、むしろ現地の資源の高度化の妨げになることもある。現地の環境や資源を発展させるためには、製品の設計は、現地適応よりも国際標準化することが望ましい時もあると考えられる。設計についてもそのまま現地で適用することが、現地環境の変化によって適応を実現するという道筋もあることを理解する必要がある。

これらの事例に密着した論理をベースとして、多国籍企業の進化論の再構築を図ったのも、本書の議論の特徴である。従来の多国籍企業の理論では、現地における学習の成果として知識を、事後的に自社に統合することを理論的射程に含めていなかった。本書では、この事後的な知識の移転効率と、それについての機会主義を問題にし、従来の多国籍企業論の修正を図っている。

かつて輝いていた日本企業は、今は世界からあまり注目されない存在になってきている。その一つの理由は、本書で扱ったトランスナショナル化がうまく進められなかったことにあるとされている。だが、プロセスを精緻に理解することなく、企業に方策を提案するのは、無駄なだけでなく有害でさえある。本書の研究成果をふま

えることで、グローバル戦略に関する議論が、単に欧米企業の型を写し取るような議論ではなく、日本の状況をふまえた戦略論に少し

でも近づけることができるのであれば、著者として望外の喜びである。

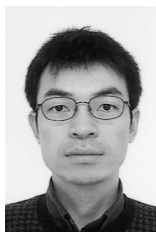
### 退任教員の紹介

平成二十一年三月三十一日 定年退職  
経済学研究科・経済学部教授

#### 山本裕美

一九七四年 三月 京都大学農学研究科博士課程  
一九九二年 一月 京都大学農学博士の学位取得  
一九九七年 四月 京都大学経済学研究科教授  
二〇〇二年十二月 京都大学経済学研究科附属上海センター長  
二〇〇七年 四月 京都大学公共政策大学院教授兼務

## 新任教員の紹介



若井克俊

経済学研究科・経済学部准教授

**就任年月日**  
平成二十年十月一日

**担当講義科目**  
学部/ミクロ経済学Ⅰ  
大学院/意思決定論、証券市場の行動学的分析

**出生地・生年月日**  
埼玉県  
一九六七年二月五日

#### 感想・抱負等

平成二十年度後期より経済学研究科に赴任いたしました。ミクロ経済学や意思決定論などを担当いたします。本研究科赴任以前はアメリカニューヨーク州立大学バッファロー校で五年、その後小樽商科大学で一年三か月あまり教鞭をとっておりました。現在は教育研究に携わらせていただいておりますが、大学

平成二十一年三月三十一日 定年退職  
経済学研究科・経済学部教授

#### 西村周三

一九七二年 三月 京都大学経済学研究科博士課程  
一九八七年 四月 京都大学経済学部教授  
一九八八年 三月 京都大学経済学博士の学位取得  
一九九〇年 四月 京都大学経済学研究科教授  
一九九九年 十月 京都大学経済学研究科長  
(二〇〇〇年三月まで)  
二〇〇四年 四月 京都大学経済学研究科長  
(二〇〇六年三月まで)  
二〇〇六年 四月 京都大学副学長(現在に至る)



草野真樹

経済学研究科・経済学部准教授

**就任年月日**  
平成二十一年四月一日

**担当講義科目**  
学部/財務会計  
大学院/国際会計論A、B

**出生地・生年月日**  
滋賀県  
一九七四年三月二十二日

#### 感想・抱負等

大阪経済大学で七年間教鞭を取り、本年四月より京都大学に着任いたしました。学部・大学院では、財務会計や国際会計などの講義を担当いたします。近年、会計基準の国際的統合化の下で、資産と負債を公正価値で評価する公正価値会計(時価会計)が推進されています。現在、公正価値会計が企業業績や経営者の意思決定にどのよう

な影響を与えるのかに関心を持って、研究を進めています。今後はより一層時間とエネルギーを投入して研究に励む所存です。微力ではありますが、教育・研究活動を通じて、本学に貢献して参ります。ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。





経済学研究科・経済学部准教授  
神事直人

就任年月日  
平成二十一年四月一日  
担当講義科目  
学部／国際経済学、経済英  
語B

大学院／国際貿易論A、B  
出生地・生年月日  
長野県  
一九六八年

感想・抱負等

本年四月に経済学研究科に着任致しました。専門は国際経済学で、特に国際貿易論を中心に研究を行っています。カナダのブリティッシュ・コロンビア大学でMBAを取得後、シンクタンク勤務を経て、一橋大学と岡山大学で教鞭をとってきました。出身大学は東北大学で、これまで京都大学とはあまりご縁があ

りませんでした。今回縁あってお世話になることになりました。微力ではございますが、本研究科の恵まれた研究環境を活かして、国際的に通用する水準の研究成果を継続的に出せるよう努力して参りますとともに、学部及び大学院教育にも力を注ぎ、本研究科の研究・教育に少しでも貢献して参りたいと考えております。天然資源に恵まれない、食糧自給率も低い日本にとって諸外国との貿易は欠かすことのできない重要な経済活動です。そのことを踏まえて、学生の皆さんには国際経済学の重要性や面白さを伝えて参りたいと思います。よろしくお願い致します。

各支部からの便り

東京支部

「百年に一度」と言われている経済危機も、米国の金融不安解消と共に、底入れも近いかと見られるようになってきた。日本経済の動向もさることながら、これが同窓会活動にどう影響してくるか、が私の懸念するところである。

一月十日(土)、学士会館での第二十四回経済懇話会は、諸富先生のCO。削減のお話と新年賀詞交換会を兼ねた集りであったので、ほぼ例年通り百十九

名(申し込みは百四十一名)の出席で盛況裡に終了した。これで一安心した。

三月五日(木)東京會館で第十九回支部総会を開催、講師は京大物質・細胞統合システム拠点の中辻憲夫教授で、「万能細胞(ES細胞やiPS細胞などの多能性幹細胞)の素晴らし

い能力と医学及び創薬への応用」について、真摯で情熱のこもったお話を頂いた。資料も充分用意されて、難しいテーマを



ES細胞・中辻先生講演

なんとか理解することが出来たようだ。

今回は、ピアノの山浦可奈子さんを迎えて、BGM的にも演奏して頂き、終始なごやかな雰囲気であり、京都からは森棟先生、新学部長の八木先生ほか五名、計七名の先生方がご出席下さり、今回から出席者の名札にゼミ名を入れたこともあって、ゆっくり懇談することが出来た。

問題は出席者数である。申込者一九〇名、出席者一六一名と例年よりかなりの減少となった。不況の影響もあるのだろうが、申込者ベースで一九〇名のうち、S四十六年卒までが一七〇名という数字を見ると、六十歳以上に偏った継続的支持層という実態が明確になってくる。

支部総会への案内状発送先約三、七〇〇名の構成は、S四十五卒まで・五十四パーセント、S四十六〜六十三卒・二十四パーセント、H卒・二十二パーセントとなっており、約半分の現役層(不況下で忙しい)からの出席者が如何に少ないか、というのが現実である。このまま無為無策で放置しておけば、東京支部の活力が年々低下してゆくことは明らかである。

この様な危機意識をバネにして、「活性化・再構築」を進める小グループを若手(?)常任理事を中心に発足させ、組織強化、活動・イベント拡充、

年次総会改革等抜本的な見直しを開始した。九月に開所される予定の「京大東京オフィス」は、我々のこの動きの強い支援となるもので大いに活用させて頂き、同窓会活性化を必ず実現したいと考えている。

(合田隆年(昭三十五卒))



山浦可奈子さん(H15院卒)ピアノ演奏



森棟学部長・先生紹介



的場先輩・乾杯スピーチ

大阪支部

一. 理事・幹事会

平成二十一年二月五日(木)に、理事・幹事会が大阪市内のガスビルにおいて、二十名の出席のもと開催された。河合支部長、来賓の森棟公夫京都大学経済学部同窓会理事長・経済学部から挨拶があり、支部活動の状況、収支決算、役員人事等が審議された。特に新任役員は昭和四十年から五十年の卒業年次毎に充実をはかり、この結果理事三十九名、幹事十八名合計五十七名の役員構成になった。

二. 第十八回大阪支部総会・講演会・懇親会

平成二十一年二月五日(木)に、大阪市内のガスビルホール・食堂にて、一〇〇名の同窓会員の出席のもとに、盛大に開催された。河合支部長の挨拶、森棟公夫経済学部長および同窓会理事長から来賓の先生五名のご紹介があり、京都大学の近



大阪支部総会



大阪支部総会

況や経済学部の活動を詳細にご説明頂いた。同窓会をご担当されている櫻田先生から一年間の活動状況のご報告がありました。第二部の記念講演会として、京都大学経営管理大学院教授の徳賀芳弘先生から「国際会計基準を巡る動向」という、興味深い論題で講演をいただいた。

第三部の懇親会では、理事の吉村昭道氏(昭四十一卒)の名司会のもとに開宴。冒頭河合支部長の挨拶があり乾杯で幕を明け来賓の先生からも挨拶を頂く等、和気あいあい懇親を深めた。特にアトラクションとして、ヴァイオリニスト松尾依里佳さん(平十九卒)の素晴らしい演奏は出席の先輩諸氏に感動を与えた。最後に松尾さんの伴奏で全員が「琵琶湖周航歌」を大合唱した。

三. 大阪支部事務局(連絡先)場所  
大和ハウス工業株式会社  
秘書室気付



神戸同好クラブ懇親会

今年六月二十六日に十五名が参加して同窓会が神戸の老舗料亭「山田屋」で開催されました。懇親会に先立ち、神戸支部会

員である京都大学名誉教授の本山美彦大阪産業大学教授に特別講演をお願いしました。テーマは「八ミルトン・プロジェクトをめぐってーオバマ政権・経済閣僚の特質」という興味ある内容。通常のニュースでは知りえない米国内政・経済戦略の背景を分かりやすく解説いただきました。

が苦労されている様子が伝わってきました。現在、約五十名の卒業生が神戸支部会員として同窓会に登録されています。今年参加者の最年少が四十六年卒の会員であり、多くの参加者は現役を退いておられました。高齢化が神戸支部でも大きな課題です。神戸在住の若い卒業生をご存知でしたら是非ご紹介ください。



神戸同好クラブ懇親会

の活性化など、いろいろな試みについて説明がありました。異なった価値観、文化の若い世代を育てるために大学が

が苦勞されている様子が伝わってきました。現在、約五十名の卒業生が神戸支部会員として同窓会に登録されています。今年参加者の最年少が四十六年卒の会員であり、多くの参加者は現役を退いておられました。高齢化が神戸支部でも大きな課題です。神戸在住の若い卒業生をご存知でしたら是非ご紹介ください。

の活性化など、いろいろな試みについて説明がありました。異なった価値観、文化の若い世代を育てるために大学が

の活性化など、いろいろな試みについて説明がありました。異なった価値観、文化の若い世代を育てるために大学が

の活性化など、いろいろな試みについて説明がありました。異なった価値観、文化の若い世代を育てるために大学が

神戸支部(神戸同好クラブ)

住所 千五三〇一八二四一 大阪市北区梅田三丁目三番五号 電話番号 〇六一六三四二一一五一一五 FAX番号 〇六一六三四二一一五一一六 メールアドレス a.fujimura@daiwahouse.jp (河合同一(昭三九卒))



大阪支部総会(ヴァイオリン演奏)

当支部は、会員数五〇名程度の小さな組織ですが、五〇年以上にわたって、元気に活動しております。昨年度の活動実績などは、つぎのとおりです。

① 上期総会・懇親会 平成二〇年七月十二日(土)午後五時より、伊予銀行松山保養所にて例会。出席は十六名。本部よりディミター・ヤルナゾフ講師がご参加。

② 下期総会・懇親会 平成二十一年二月七日(土)午後五時より、伊予銀行松山保養所にて例会。出席は十五名。本部より森棟公夫学部長がご参加。始めに松山大学鈴木茂教授から

③ 平成十八年九月、京都大学愛媛同窓会(全学)が設立され、平成二十年十二月五日(金)に、第三回の総会と懇親会が開催された。今年度の開催については、経済学部と法学部が、当番幹事となっており、目下準備作業に入っています。

愛媛支部

九州北部支部

九州南部支部

代表取締役社長) 例年五月に年一回の総会・懇親会を開催しており、今年度は五月二十一日(水)にホテルオークラ福岡において、オプザーバー参加の法学部卒一名を含め、二十七名が出席した。

総会では、鎌田支部長からの挨拶の後、ゲスト参加いただいた文世一教授から、大学ならびに経済学部の近況などを紹介いただいた。その後、恒例となっている参加者全員による自己紹介を行った。一年ぶりの再会となったメンバーは、学生時代の思い出や京都への思いのほか、最近取り組んでいる仕事のことなど近況を報告しあい、懇親を深めた。

また、今回は、現在の大学の状況を知るために、昨年大学の広報センターが作成したDVDを放映したが、こちらも好評であった。

五、その他 今後も、同窓会本部と連携を図り、同窓会の発展に努めたい。



九州北部支部 総会



理事：熊本県理事 林田素行氏（昭和四十四年卒、林田公認会計士事務所所長）、宮崎県理事 岡野徹氏（昭和三十八年卒、旭有機材工業(株)相談役）、鹿児島県理事 丸元貞夫氏（昭和三十八年卒、阪東機工(株)代表取締役会長）

会計監事：中村隆之氏（平成八年卒、鹿児島国際大学経済学部准教授）



九州南部支部 総会

二、講話  
熊本県立大学総合管理学部教授 久間清俊氏（昭和四十四年卒）が、「資本主義市場経済の発展段階の法則について―グローバル経済を中心に―」と題し、約一時間講話をいただいた。

三、懇親会  
懇親会は、海江田順三郎氏（昭和二十八年卒、高島屋開発(株)代表取締役社長）の乾杯により開宴。出席者それぞれの近況報告を行い、学生時代の思い出話や今後の展望について、酒盃を交わしながら歓談が行われた。また、若い世代との交流も出来、和やかな雰囲気のもと、有意義な意見交換ができた。

※九州南部支部連絡先  
・鹿児島国際大学総合企画室 千八九一〇一九七  
・鹿児島市坂之上 八―三三―四一〇  
TEL 〇九九―二六三―〇七―七  
FAX 〇九九―二六一―三六〇六  
・メールアドレス  
sogok@aku@ofc.iuk.ac.jp  
(川畑美樹(鹿児島国際大学))

# 京都大学経済学部 卒業五十周年記念同窓会

(昭和三十四年卒「山紫会」)

池田啓一郎 (昭三十四卒)

昭和三十四年に経済学部を卒業した私達の同窓会は三十四年を文字読みして山紫会と称し活発な活動をおこなってきました。山紫会は東京・名古屋・関西に支部を持ち、東京、関西は夫々二ヶ月に一度定期的に昼食会を開催するほ

か、ゴルフ会、歩こう会なども頻りに開いています。今年で丁度卒業五十周年を迎えることとなり、その記念総会を大学百周年時計台記念館の国際交流ホールで開催いたしました。今まで全国総会は五年毎に京都のホテルで開



山紫会 卒業50周年記念

いてきましたが、今回は初めて大学の国際交流ホールを使わせていただきました。思い出深い法経大教室のあった時計台のホールで、五十年前を振りかえりながら記念の総会を持つことができ、参加者一同まことに感無量でありました。

平成二十一年五月二十七日、当日は新型インフルエンザの影響で京都市内の各大学は閉校するところが多く、わが京都大学はどうなるのだろうか、と気をもみましたが、幸いにも無事に平常どおり開校されることとなり、ほっと胸をなでおろしました。

総会に参加した会員は一〇〇名余、それに若干の夫人も参加され、三十二名の物故者を除く出席率は六十五パーセントと上々でした。

大学からは経済学部長八木紀一郎先生と、同窓会のお世話をお願いしている櫻田忠衛先生を来賓としてお迎えいた

しました。

午前の部は「清風荘」(旧西園寺公望公爵邸、現総長迎賓館)を見学、そのあと時計台前広場で全員の記念写真を撮ったあと懇親会にはいりま

懇親会は全員で物故者に黙祷を捧げ、世話人代表(池田啓一郎)の開会挨拶、東京山紫会代表(坂本典之君)、名古屋山紫会代表(高井睦朗君)の挨拶、八木学部長からのご祝辞のあと、大槻隆一君発声の乾杯で宴が始まりました。

宴は山中祥光君の司会で進行、アトラクションとして平成十九年経済学部を卒業し幅広く活躍中の松尾依里佳さん姉妹のバイオリン・アンサンブルを楽しみました。

宴もたけなわになると、あちこちで談笑の輪が広がり、クラスやゼミのグループごとに記念撮影がおこなわれるなど大いに盛り上りました。

最後に浦上敏臣君の閉会挨拶のあと、八木、櫻田両先生も加わっていただき全員手に



山紫会ゴルフ 卒業50周年記念

## 第四回京都大学 ホームカミングデーのお知らせ

手をつなぎ、教養時代に歌った三高寮歌「逍遙の歌」、「月見草」、「琵琶湖周航の歌」を大合唱して閉会となりました。終わりに、この総会開催まで長い準備期間を含めて種々のご尽力を頂いた稲葉貞夫君、

南健一君、西村淳暉君、山中祥光君をはじめ数多くの世話人のみなさんに厚くお礼を申し上げます。  
(池田啓一郎(昭三十四卒))

京都大学卒業生および修了生を対象とした全学的な親睦交流の場として二〇〇六年に初めてホームカミングデーが開催されました。現在は毎年十一月第二土曜日に開催するというルールを決め、二〇〇九年は十一月四日(土)に開催されます。

京都大学を卒業されたみなさんにとって「ふるさと」の一つでもある京都大学を訪問していただく機会です。多くのみなさまのご参加を歓迎します。

メイン企画は時計台百周年記念ホールで十三時から全体会議(総長挨拶ほか)、十三時五〇分から伏木亨農学研究所教授による特別講演、十四時三〇分から京大オーケストラによる記念演奏会がおこなわれます。その後、十五時三〇分から時計台国際交流ホールで「ミキサー(交流会)」(一人一、五〇〇円 事前登録制)が開かれます。

今年から実施される新企画は二つ。第一に、卒業後三〇周年、四〇周年、五〇周年、六〇周年以上の卒業生と松本紘京都大学総長とのランチ(十一時から 京大正門横力

ンフォーラ 会費二、〇〇〇円 事前登録制)が開催されます。周年の基準は、学部または最終学歴によります。それぞれ先着一〇名さまを予定しておりますので、ご関心のある方はお早めにお申し込みください。

第二に、一〇時から時計台国際交流ホールで、OB・OGと学部学生・大学院生との交流会が予定されています。京都大学キャリアサポートセンターから民間企業五〇社からOB・OG一〇〇名にご協力をお願いし、就職活動をすすめる学生・院生一〇〇名(先着順)との交流をすすめます。そのほか、総合博物館での特別展(学術映像博覧会二〇〇九)、京大サロンの平成二十一年度グローバルCOEプログラムのパネル展示、清風荘見学(事前登録制)、京都大学歴史探訪(田辺朔郎博士と琵琶湖疎水 事前登録制)などが予定されています。

なお、企画等は変更される場合があります。詳しくは京都大学ホームページ  
(http://www.kyoto-u.ac.jp)をご覧ください。  
(京都大学同窓会幹事 経営管理大学院教授 若林靖永)